

論文審査の結果の要旨

報告番号	乙 第 1211 号	氏 名	安 永 能 周
論文審査担当者	主 査 中 山 淳 副 査 加 藤 博 之・伊 藤 研 一		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>近赤外線照射はラットにおいて血管平滑筋細胞のアポトーシスを誘導し、真皮下血管網に対して熱エネルギーを介さずに持続的な血管拡張を引き起こす。そこで近赤外線の血管拡張作用によって皮弁の末梢部分に生じ得る壊死を予防できるかどうかを明らかにするため、ラットの背部に作成した有軸型皮弁の右半分に近赤外線を照射して、近赤外線が皮弁の生着範囲を延長するかどうかを検討した。</p> <p>その結果、安永は以下の成績を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">1) コントロール群では左側 (57.8±4.5mm) と右側 (59.0±3.6mm) の生着範囲に有意差がなかった。2) コントロール群の左右の生着範囲の平均は 58.4±3.9mm で、変動係数は 6.7%であった。3) 近赤外線照射群では照射側 (73.3±11.7mm) の生着範囲が非照射側 (67.3±14.9mm) より大きかった ($P = .03$)。4) 全ての個体で照射側の生着範囲が非照射側を 1mm から 13mm 上回り、照射側が短縮した個体はなかった。5) コントロール群 (58.4±3.9mm) と近赤外線照射群の非照射側 (67.3±14.9mm) の生着範囲には有意差は無く、非照射側が同一個体内のコントロールになり得た。 <p>以上より、近赤外線照射はラットにおいて有軸型皮弁の生着範囲を延長させると考えられた。また、本研究で開発したラット皮弁モデルは同一個体内にコントロールを持つため、少ない個体数で有意差を得ることが可能であり、皮弁生着範囲に関する研究の加速や動物愛護に寄与する可能性がある。したがって主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			